

きのこの会議 かいぎ

レベル 初中级 しよちゅうきゅう

【原作】夢野久作 げんさく ゆめのきゆうさく

【簡約】鈴木茅優 かんやく すずきちひろ

【挿絵】小野菜々花 さしえ おのななか



ある日の夜です。

森の中で、たくさんのきのこが話していました。

初めに、初茸が立ち上がりました。

初茸は、他のきのこたちに言いました。

「みんな。最近、だんだん寒くなりました。

私たちは、暖かくなるまで、土の中で休まなければなりません。

ですから、私たちは、しばらく会えません。



今夜は、みんながいつも思っていることを、たくさん話してください。

私を書いて、新聞に出します。」

次に、椎茸が立ち上がりました。

椎茸は、言いました。

「みんな。私は椎茸です。」

最近、人間は私をととても大切にします。

人間は、私たちの畑を作ります。

ですから、大きな子どもがたくさんできます。



人間が、他の畑も作るように願います。」

今度は、松茸が立ち上がりました。

松茸は、言いました。

「みんな。私たちの仕事は、大きな子どもを作ることです。

そして、人間に食べられることです。

しかし、人間は、私たちの子どもがまだ小さいのに、

喜んで食べてしまいます。

それに、椎茸のような畑も作りません。

ですから、私たちは子どもができません。

とても困りました。

なぜ、人間は気が付かないのでしょうか。

とても残念です。」

松茸は泣きました。

他のきのこは「そうだ、そうだ。」と言いました。

みんなは、松茸の話聞いて、とても悲しくなりました。

すると、みんなの後ろから笑い声が聞こえました。



そこには、蠅取りきのこがいました。

蠅取りきのこは、毒きのこです。

毒きのこは、人間の体を病気にします。

蠅取りきのこは、毒きのこの中で一番大きいです。

蠅取りきのこは、みんなの真ん中に立ちました。

蠅取りきのこは、大きな声で言いました。

「お前たちはみんな、知らないのか？」

きのこは、おいしいから、人間にたくさん取られてしまう。



おいしくなければ、取られない。

友達や家族がいれば、いいじゃないか。俺を見ろ。

俺は、おいしくないから、人間の体を病気にしてしまう。

そして、人間を殺してしまう。

他の毒きのこは、人間を毎年毎年、殺している。

お前たちも早く、人間の身体を病気にするために勉強しろ。」

蠅取りきのこの話を聞いたあと、

「人間の毒になれば、こわくない。」と思うきのこもいました。

そして、だんだん、空そらが明るくなりました。

すると、森もりに来たのは、人間にんげんの家族かぞくでした。

きのこたちは、蠅取りきのこの言うとおりに、

毒どくがあるほうがいいのか、調べてみました。

人間にんげんの家族かぞくは、きのこたちを見て、とても喜よろこびました。

父とうさんと呼よばれた、男おとこの人は言いいました。

「きのこの数は少すくないと思おもっていた。



けれども、いろいろなきのこがたくさんある。」

母^{かあ}さんと呼ばれた、女^{おんな}の人は言いました。

「ああ、きのこをたくさん取^とってはいけません。

大切^{たいせつ}に取^とらなければなりません。」

姉^{ねえ}さんと呼ばれた、女^{おんな}の子^こは言^いいました。

「小さいきのこを、取^とっては駄^だ目^め。かわいそう。」

坊^{ぼっ}ちゃんと呼ばれた、男^{おとこ}の子^こは言^いいました。

「ああ。あそこにも、ここにもきのこがある。」

人間の家族は、一生懸命、きのこを探しました。

少しすると、父さんは気が付きました。

父さんは、家族に言いました。

「おいおい。ここに、毒きのこがたくさんあるぞ。

これは、みんな毒きのこだ。

取って食べたら、死んでしまうぞ。」

茸たちは、蠅取りきのこの言うとおり、

毒があると人間は食べないと分かりました。



人間の家族は、たくさんきのこを取りました。

しばらくすると、父さんは、家族に言いました。

「さあ、帰ろう。」

すると、姉さんと坊ちゃんが、立ち止まりました。

姉さんは、言いました。

「毒きのこは、みんな、かわいくないねえ。」

坊ちゃんは、言いました。

「うん。僕も、そうだと思う。」



それから、毒どくきのこは全部ぜんぶ、坊ぼっちゃんに踏ふまれてしまいました。

おしまい。



やさしい日本語で読む日本文学
『キャラメルと飴玉』『きのこ会議』

2023年3月1日発行

発行 宮城学院女子大学 学芸学部 日本文学科

印刷 株式会社 フロット

許可なしに転載・複製することを禁じます。